

可能となった。われわれは MRS の臨床応用として表在性腫瘍の ^{31}P -MRS を治療経過に沿って計測、その変化を観察することによってこの手法が腫瘍の放射線治療にたいする効果の早期判断の指標となりうる可能性を考察した。腫瘍は通常低酸素状態にあり無機リン/フォスホクレアチンの比は増大しているが、治療に反応する例では早期にこの比が減少する。また PH は同様にアルカロシスに傾き、これらは腫瘍の再酸素化との関係が示唆される。PME, PDE は相対的におおきなピークをもち、腫瘍における特異性が論議されているが、その本質はいまだ確立されていない。

5) TBI 施行時における治療線量の検討

山崎 芳裕・関谷 昌四 (新潟大学 放射線部)
井上 富夫
齊藤 眞理・日向 浩 (放射線科)

BMT に対する TBI (Total Body Irradiation) は年々増加傾向にあり、現在まで35例を施行した。現在私共の行なっている TBI の治療線量の現状についてファントム実験等を試み、検討した。その結果、

1. ファントムによる測定において目的線量が肩部で-7%を除いて他部位で±5%以内であり、良好な結果を得た。
2. 実際の治療例においては、肩部で-9%、下腿で+10%、他部位で±5%となり基準深の選び方の検討が必要である。
3. 過去の症例全体についてみると、頭頸部線量が目的線量より低い値を示す傾向にあり、体位の設定や補償材を薄くするなどの検討、対策が必要である。

6) 上咽頭癌の遠隔転移

—予防的多剤化学療法を中心として—

安住利恵子・三浦 恵子 (新潟大学 放射線科)
齊藤 眞理・稲越 英機
酒井 邦夫
五十嵐文雄 (耳鼻科)
鈴木 利光 (第1病理)

1968-1986 年の上咽頭類表皮癌 M0 新鮮治療52例について、初回治療後出現した遠隔転移の様相、転移予防の適応及び82年7月以後初回照射に併用した ADM, VCR, CDDP 主剤化学療法 (多剤治療) の転移予防効果を検討する。

転移は骨に好発し、全て多発性であり、13例中12例が2年以内に出現し、出現後5年以上生存は2例に過ぎな

い。N3 と T4 の2年転移率が高く (N3:44%, T4:41%), 1例を除き全て N3 あるいは T4 であった。T1-3, T4 と N0-2, N3 を組合わせて、転移危険度は4群に分けられる。このうち、T4N0-2群では2年転移率が歴史的対照:67%(n=7) から多剤治療:14%(n=7) に低下した。

以上のことから、N3 と T4 には転移予防が必要であり、また多剤治療の効果が示唆される。

7) 20年間の放射線治療食道癌 5年以上生存 4例の呈示

小林 晋一・新妻 伸二 (がんセンター)
清水 克英・佐藤 洋子 (新潟病院放科)
古泉 直也

昭和44~63の約20年の食道癌放射線単独治療例中5年以上生存例が4例あった。

- 1) この間の食道癌放例は229例、男女比4.7:1、年齢33~88、(66.9)才。治療的照射例135、非治療的照射例67。
- 2) 相対生存率は1生率25.9%、2生率12.2%、3生率6.3%、4生率5.4%、5生率3.0%、6生率2.5%、7生率2.7%であった。
- 3) 5生例4例のまとめ①年齢は68~89 (75.5)才。②男女比1:3 (1:14.1)、③部位 Cel, Iu1, Im2。④腫瘍型は腫瘤2、鋸歯1、ロート1、⑤腫瘍径は5cm ≥が1、5~10cmが3例。⑥照射線量は60Gy 1、70Gy 3例。⑦治療目的は治療的照射例3、非治療的照射例1であった。

8) Destructive spondyloarthropathy をきたした長期血液透析患者の1例

横山恵美子・登木口 進 (新潟大学 歯科放射線科)
伊藤 寿介
高橋 直也 (放射線科)

腎不全のため血液透析を受けている患者の骨関節にみられる異常のうち、最近注目されている脊椎の異常として、骨単純写真上、脊椎炎に似た所見を呈する destructive spondyloarthropathy がある。我々は14年間にわたる血液透析を受けている患者で、同病変と考えられる頸椎病変を有した症例を経験したので画像所見を中心に報告した。

中高年者の下位頸椎に多いことで症状からは変形性頸椎症を疑われやすいが、画像所見が異なることで鑑別は容易である。脊椎炎との鑑別には炎症所見を欠くということが重要である。